

第Ⅳ章 総括

第1節 縄文時以外の遺構について

今回の調査で縄文期以外の遺構が確認されたのはC区のみである。池状遺構、1号溝状遺構、2号溝状遺構、4号溝状遺構、3号土坑、4号土坑である。2基の土坑に関しては検出状況から、4号溝状遺構に伴う遺構と考えられるが、それ以外の遺構は埋土中から9～10世紀に相当する土師器、須恵器が出土しており、相当期に使用された遺構と考えられる。本文中でも述べたように池状遺構と1号溝状遺構は遺構同士の先後関係を確認できず、同時期に使用された遺構と考えられる。これまでに述べたように遺跡の傍らには山塊が迫っており、特にC区の延長上には山塊の谷部が控えていることが確認できる。その谷部の出口付近の水を得やすい地点に設けられ、土層の最下層でグライ化が確認でき、調査中も常に湧水のあったこの池状遺構は溜め井として機能していたと考えられ、底面が池状遺構とは反対側に向かって下り勾配になる1号溝状遺構はその排水用の溝だったと考えたい。

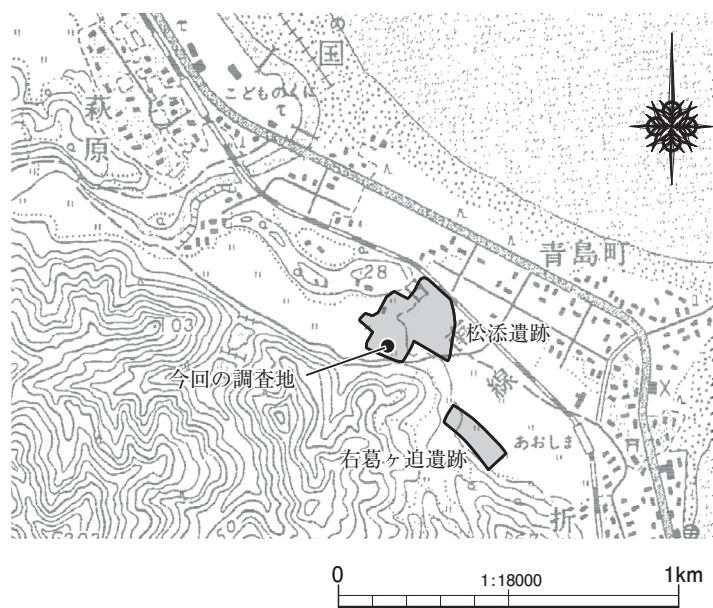
第2節 縄文時代の松添遺跡の環境

今回の調査で確認された遺物の大半はA区、B区の基本層序Ⅱa層、Ⅱb層の遺物包含層からの出土であった。A区Ⅱa層の遺物出土が集中する範囲、C区Ⅱb層の遺物出土が集中する範囲ともにそれぞれ偏りが見られ、調査区外への遺物の分布の広がりを見せる。その先にあるのが平成5年に宮崎市が発掘調査を実施した調査区にあたる。(第2図) この調査区はG区と付され、調査区全面で縄文時代後期から晩期にかけての高密度の遺物包含層が確認されている。今回の調査で確認されたⅡa層、Ⅱb層の遺物集中出土範囲は平成5年調査のG区で確認されたその縁辺部が捉えられたものと考えられる。昭和20年代からの松添貝塚の学術調査を含め、松添遺跡では今回の調査を合わせ、約9800㎡を面的に発掘調査したことになる。特に平成4年から7年にかけて実施された土地区画整理事業に伴う発掘調査では、縄文時代後期晩期の土器を主体とする遺物がパンケース換算で合計1800箱以上出土しており、当該地で大規模な縄文期の集落を想起することができるが、検出された遺構は、集石遺構が1基、円形の土坑が2基確認されたのみで、遺物量に見合うほどの遺構は確認されていない。当時の調査担当者は、特に遺物が集中して出土した場所は、調査時も水がよく湧く場所であったため、本来、遺構を設けるには適さない環境だったとしており、当該地は縄文時代後期後半から晩期の間は土器廃棄場として利用されていたのではないかと結論付けていた。

今回実施された発掘調査においても縄文時代後期晩期の土器は合計160箱以上したが、縄文時代に相当すると考えられる遺構はA区で検出された1号土坑、2号土坑の2基のみであった。

宮崎市田野町にある本野原遺跡は約9000㎡の範囲に縄文時代後期を中心とする竪穴建物113軒、掘立柱建物などが確認されており、西日本最大級の縄文集落とされる。その本野原遺跡でも出土量は約450箱である。松添遺跡の合計2000箱近くになるその出土量は突出しており、傍らに大規模な集落があったことを想起せざるを得ない。第Ⅰ章で述べたように、遺跡の南西側に控える山塊上には縄文集落を形成できる平坦な土地は見当たらないため、丘陵上で生活を営む人々がもたらした遺物とは考えにくい。

松添遺跡のある海岸線に平行して形成された長さ約3.0km、幅0.3～0.5m、標高11.0m程の砂丘には、右葛ヶ迫遺跡、納屋向遺跡などの縄文期の遺跡が点在する。中でも右葛ヶ迫遺跡と松添遺跡は直線距離で300mと近く、調査では縄文時代中期～晩期の竪穴建物2軒、集石遺構8基確認されている。右葛ヶ迫遺跡も遺跡の傍らまで山塊が迫っており、調査で確認された縄文期の遺構の広がりには海側の砂丘上には砂丘上に営まれた集落の縁辺部のとも考えられ、集落本体は海に向かって広がる砂丘上に形成される可能性がある。



第63図 昭和40年頃の松添遺跡の周辺地形（1/18000）